

父が脳梗塞を患ってから10年ほどになる。当たり前のように、悪いことをすれば怒られ、良いことをすればほめてもらえる、普通の親であった。また、仕事はバリバリとこなし、酒を飲むのも大好きな社交的な父であった。そんな父の大きな背中では、成長していく私に何かしらの威厳を見せていた。

高知県の少年非行の概要が発表され、平成23年中の非行率 1および刑法犯検挙人員に占める刑法犯少年の割合は、いずれも前年に引き続き全国ワースト1位だった。また、ぐ犯少年 2・不良行為少年 3の数は、前年比100人増の6178人で、行為別では、深夜はいかいが3632人で最も多く、喫煙が1905人で続いている。

この背景には、子どもたち自身の抱えている性癖もあると思うが、それにもまして親の問題が多々あるのではないかと思う。

7月1日付の高知新聞の「きょうの言葉」に、「子を養いて教えるは、父の過ちなり」という言葉の解説が掲載されていた。「子どもにはいろいろなことを教えなければならぬ。というのも、どんな子どもも、大人になって、一人前の社会人として生きていけるように育てなくてはならないからだ。どんな時代においても、それが親としての責任というものである」との書き出しで始まる文章に

「親の背中」

は、「その基本となるのが親のしつけということになる」と書かれている。

よく親の背中を見て子は育つと言われるように、親の行動は子の成長にとって大切なものである。親の子に対するしつけほど重要なことはないと思う。

「しつかりとしたしつけが求められているのが現代社会の現状ではないだろうか」という結びが心に響く一文であった。

しばらく入院していた父が家に帰ってきた。体は痩せ細り、あんなに大きく見えていた背中はかなり小さくなっていった。しかしその背中でも、私たち子どもにしつけりとした「しつけ」を見せていた。

1 少年人口千人あたりに占める検挙・補導少年の割合。

2 一定の事由があつて、その性格または環境に照らして、将来罪を犯し、または刑罰法令に触れる行為をするおそれのある少年。

3 飲酒、喫煙、けんかその他自己または他人の徳性を害する行為をしている少年。

お問い合わせは
人権啓発広報委員会

(880・6569) まで